

になってきました。だから連歌集を作る計画が発表されるとわれもわれも申し込みが集つて、その申し込みを途中でしめ切らねばならないほどでした。そのくらい、このころの連歌はさかんでした。

連歌集を作るには、たいへんな経費がかかります。そのころ、現在の山口県あたりを支配していた大名に、大内政弘という人がいました。代々武士として地方の豪族をほろぼして大名の地位を作りあげてきたのですが、一方では京都の貴族文化にあこがれをもち、京都にならつて山口の町を作ってきました。連歌にも大きな関心をもつていて、この連歌集を作るための後援をしてくれることになりました。

そこで、延徳元年（一四八九年）には宗祇が、翌二年には兼載が、はるばる山口まで大内政弘をたずねていきました。新しい連歌集を作る相談がされたものと思われます。